

「鼻から息する者」

ユダヤ人の教育の中にこんなことがあるそうです。三、四歳くらいになりましたわが子を少し高い台の上にのせて、その子供の前に父親が立ち、腕を広げて「飛び降りなさい」といいます。子供はお父さんに向かってジャンプします。しかし、その瞬間、父は腕を引っ込め、子供は地に落ちます。高い場所ではないのでケガはしませんが、子供はドキッとするそうです。父親はニコニコしながら子供に言います。「いいかい、鼻から息する人間に全く信頼してはいけないよ。そうではなくて神に頼りなさい」私達には子供がかわいそうに思われる光景ですが、それは二千年もの間、密告を受け、財を奪われ、国を追われた民族の中から生まれた思いなのでしょう。

そして、ここでこの父親が言っています「鼻から息する者」というのは聖書、イザヤ2章22節の言葉なのです『あなたがたは鼻から息の出入りする人に、たよることをやめよ、このような者はなんの価値があるのか』。

私達は人間です。私達はこの人間ということについて色々な定義を持っています。ここに記されている「鼻から息の出入りする者」というのは我々を作られた神の側からの人間の定義です。そうです、神にとって私達は鼻から息をする者なのです。

この言葉の意味は人が創造された時にまでさかのぼります『主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで人は生きた者となった』（創世記2章7節）。このことは私達が皆、神から命の息を吹き入れられたことにより今を生かされている者であり、その命は神の御手の中にあるということを示しています。私達が死ぬ時に日本語では「息を引き取る」とか「土にかえる」と言いますが、これらはまことに正しい表現なのです。我々はこの小さな鼻の穴と口を数分、塞がれるだけで命を失う者なのです。

人はこれまで色々な功績を残してきました。しかし、それらは私達が鼻から息をしている限りのことであり、私達はそのリミットを超えることはできませんでしたし、これからもそれをを超えることはできませんでしょう。我々はそのような意味で本当にはかないものです。

私には信頼している人がたくさんいます。その方たちはいつも信頼に応えてくれます。皆さんもそのような人がおりますでしょう。このような方たちは私達にとって頼もしい方達です。しかし、私達は心のどこかに「人は完璧ではない」ということを認識していなければならないと思います。我々は悪気なく物事を忘れてしまったり、魔がさすようなことをしてしまったり、その日の気分や状況により感情にムラが出てきたり、自らの保身のために嘘偽りを述べたりすることがあるのです。それが鼻から息する私達です。

このようなことを皆さんに話して人間は一切信頼するなど言っているのではありません。たとえ信頼に足る人であったとしても人である限り、その信頼に応えられないことがあるのだということを確認したいのです。そこで今日はこの「鼻から息する者」ということをテーマを見ていきましょう。

先週は大祭司であったエリの二人の息子が宮のものをかすめたり、その宮に仕えている女性と関係をもっていたゆえに、彼のイスラエルにおける霊的なはたらきがサムエルに移ったということをお話しました。しかしながら、国民から大きな尊敬を受けていたこのサムエルの息子達も同様な問題をもっており、サムエルの跡を継ぐことができず、民は彼に自分達のために王を立ててくれと求めたということをお話しました。

その時のいきさつについてこのような記録がサムエル記には記されています。民はサムエルのもとに来て『今、ほかの国々のように、われわれをさばく王を、われわれのために立ててください』（サムエル記上8章5節）と願いました。そして、サムエルはこの民の願いを神様に告げます。それに対して神様は『7「民がすべてあなたに言う所の声に聞き従いなさい。彼らが捨てるのはあなたではなく、わたしを捨てて、彼らの上にわたしが王であることを認めないのである』（サムエル上8章7節-8節）と答え、サムエルは民に向かって「本当にそれでいいのか」と念を押すように、王が立てられた後のイスラエルがどうなっていくのかということをやめこう語りかけました。

11「あなたがたを治める王のならわしは次のとおりである。彼はあなたがたのむすこを取って、戦車隊に入れ、騎兵とし、自分の戦車の前に走らせるであろう。12 彼はまたそれを千人の長、五十人の長に任じ、またその地を耕させ、その作物を刈らせ、またその武器と戦車の装備を造らせるであろう。13 また、あなたがたの娘を取って、香をつくる者とし、料理をする者とし、パンを焼く者とするであろう。14 また、あなたがたの畑とぶどう畑とオリブ畑の最も良い物を取って、その家来に与え、15 あなたがたの穀物と、ぶどう畑の、十分の一を取って、その役人と家来に与え、16 また、あなたがたの男女の奴隷および、あなたがたの最も良い牛とろばを取って、自分のために働かせ、17 また、あなたがたの羊の十分の一を取り、あなたがたは、その奴隷となるであろう。18 そしてその日あなたがたは自分のために選んだ王のゆえに呼ばれるであろう。しかし主はその日にあなたがたに答えられないであろう」（サムエル上8章11節-18節）。

サムエルはそれまで王がいなかったイスラエルの民に対して、王が彼らを統治するようになった場合、どんなことが起こるかということをお話しました。王はまず自分の周りに軍隊をおき、民をその兵役に就かせ、自分の戦車の前に走らせる、すなわち王のために我々は命を犠牲にしなければならなくなり、また我々の娘達は王の前に働く者となり、また王には決まったものを捧げることになるだろうということです。これは民衆の自由を奪うような横暴な支配、また有無を言わせない重税を指しているのでしょうか。そして果

てには彼らは王の奴隷のような有様となり、その時になって彼らが神を求めても神はあなたに答えられないというのです。

以前、お話ししましたようにイスラエルの民はその時、各々、自分の目に正しいと思われることをしていました。その民達の上に鼻から息をする王が立ちましたら、その王として人間、彼らと同じように「自分の目に正しいと思われること」、すなわち「自分が願うこと」をし始めることは予め分かっていたことだったのです。

この忠告を聞いた鼻から息するイスラエルの民はその忠告に対してこう言いました『19「いいえ、われわれを治める王がなければならない。20 われわれも他の国々のようになり、王がわれわれをさばき、われわれを率いて、われわれの戦いにたたかうのである」（サムエル上8章19節-21節）。そしてこのことに対して神様はサムエルに言うのです「彼らの声に聞き従い、彼らのために王を立てよ」（サムエル上8章22節）。

そうです、この民の決断は全知全能なる神により頼むのではなく、鼻から息する王にこれからは頼んでいくということを言い表しています。こうしてサムエルはその名をサウルというその齡、三十となる男に油を注ぎます。「油を注ぐ」ということは当時、王や祭司の任職の際になされていた神様から直々に指示されていた儀式で、これによりサウルはイスラエルの初代の王となりました。

このサウルについて聖書は彼は『若くて麗しく、イスラエルの人々のうちに彼よりも麗しい人はなく、民のだれよりも肩から上、背が高かった』（サムエル記上9章2節）と記しています。サウルは若く、長身で目立ち、イスラエルにいる男達の中で彼よりも麗しい人はいなかったというのです。そうです、その外見において彼の姿は民の心にかないました。『人は見た目が九割』という本がかつてベストセラーとなりましたが、我々はエバが『食べるによく、目には美しく、賢くなるには好ましい』（創世記3章6節）ように見えたあの禁断の実を食べて以来、何ら進歩せず、こうしてイスラエルは史上初めて民の上に立つ王をその国に迎えたのです。

しかしながらその見た目にカリスマ性がありましても、それだけでは王とはなりえません。さらに必要なことはその王政に対する実績であり、そのことが試される時がすぐにやってきました。そう、サウルは王位についてからまずアンモン人との戦に向き合うことになりました。そして、その戦はイスラエルの勝利に終わりました。この勝利により民は彼を王として正式に迎えます（サムエル上11章）。そうです、民はサウルのデビュー戦の好成績を見て、サウルを認め、受け入れたのです。その時、民は自分達の目に狂いはなく、その決断が正しかったと思ったに違いありません。これでこの国も安泰だと思ったかもしれません。

しかし、後が続きませんでした。サウルはかねてからの宿敵であるペリシテ人の来襲を前に、動物の犠牲を神様に捧げるべくやってくる自分に油を注いだ祭司サムエルの到着を待っていたのですが、約束の時になってもサムエルが来ないので、サムエルを待ちきれずに自らその犠牲を捧げてしまったのです。その時の状況について聖書はこう記録しています。

「8 サウルは、サムエルが定めたように、七日のあいだ待ったが、サムエルがギルガルにこなかったので、民は彼を離れて散って行った。9 そこでサウルは言った、「燔祭と酬恩祭をわたしの所に持ってきなさい」こうして彼は燔祭をささげた。(サムエル上13章8節、9節)。祭司とは神に任命されるもので、誰もその任務を肩代わりすることはできませんでしたので、このサウルが成したことは神様の定めを破る大きな過ちとなりました。しかし、サウルはそのことをしてしまったのです。なぜでしょうか。なぜならサムエルが来ないことを知った民がサウルを離れて散り始めたからです。彼は民が自分を離れていくことに動揺し、超えてはならない一線を越えたのです。その後、どうなったのでしょうか。

10 その燔祭をささげ終るとサムエルがきた。サウルはあいさつをしようと、彼を迎えに出た。11 その時サムエルは言った、「あなたは何をしたのですか」。サウルは言った、「民はわたしを離れて散って行き、あなたは定まった日のうちにこられないのに、ペリシテびとがミクマシに集まったのを見たので、12 わたしは、ペリシテびとが今にも、ギルガルに下ってきて、わたしを襲うかも知れないのに、わたしはまだ主の恵みを求めることをしていないと思い、やむを得ず燔祭をささげました」。13 サムエルはサウルに言った、「あなたは愚かなことをした。あなたは、あなたの神、主の命じられた命令を守らなかった。もし守ったならば、主は今あなたの王国を長くイスラエルの上に確保されたであろう。14 しかし今は、あなたの王国は続かないであろう。主は自分の心にかなう人を求めて、その人に民の君となることを命じられた。あなたが主の命じられた事を守らなかったからである」(サムエル上13章8節-14節)。

このところでサウルは再び、「民がわたしを離れていく」と述べ、さらには「宿敵ペリシテが自分達の陣営の側に集まっており、彼らはすぐにでも「自分を」襲うかもしれないということゆえに、サウルを待たずにやむを得ず自ら燔祭を捧げたと言いました。

これらから分かることは、サウルは神を畏れるということではなく、彼は人間、すなわち鼻から息する者を恐れていたということが分かります。さらには彼はペリシテが「イスラエルの民を襲う」ことを恐れたのではなく、「自分を襲う」ことを恐れたのです。彼の心にはイスラエルの民を守ろうとする王としての自覚がありませんでした。それでいて民が離れることに対して不安を感じ、彼らの心をつなぎとめようとしたのです。

これがサウルの治世の始まりであり、サムエル記は後にこのサウルの王政を統括してこのような言葉で説明をしています「サウルの一生の間、ペリシテびとと激しい戦いがあった。サウルは力の強い人や勇気のある人を見るごとに、それを召しかかえた」（サムエル記上14章52節）。サムエルから宣告を受けた後もサウルは神に目を注ぐのではなくて、彼の目に頼もしいと思われる人、すなわち「鼻から息をする者」を寄りどころとし続けたのです。

こんなこともありました。サウルがアマレク人と戦っている時、「アマレク人とその属するものを一切、そうその持ち物、牛も羊もラクダもろばも一切を滅ぼせ」という神様の命令にサウルは従わず、敵の王アガグを生け捕りとし、羊と牛の最もよいもの、肥えたものならびに小羊とすべてのよいものを惜しんで残し、価値のないものだけを滅ぼしました。これらのことに対して・・・

10 その時、主の言葉がサムエルに臨んだ、11 「わたしはサウルを王としたことを悔いる。彼がそむいて、わたしに従わず、わたしの言葉を行わなかったからである」。サムエルは怒って、夜通し、主に呼ばわった。12 そして朝サウルに会うため、早く起きたが、サムエルに告げる人があった、「サウルはカルメルにきて、自分のために戦勝記念碑を建て、身をかえして進み、ギルガルへ下って行きました」。13 サムエルがサウルのもとへ来ると、サウルは彼に言った、「どうぞ、主があなたを祝福されますように。わたしは主の言葉を実行しました」（サムエル上15章10節－13節）。

サウルを訪ねたサムエルに対して、自分のために戦勝記念碑を建てたサウルは「わたしは主の言葉を実行しました」と嘘偽りを語ります。しかし、サムエルは問います「それならば、わたしの耳にはいる、この羊の声とわたしの聞く牛の声は、いったい、なんですか」（サムエル記上15章14節）。

サウルは言います「人々がアマレクびとの所から引いてきたのです。民はあなたの神、主にささげるために、羊と牛の最も良いものを残したのです。そのほかは、われわれが滅ぼし尽しました」（サムエル記上15章15節）。

サウルはこのことは自分がしたことではなく民がしたことであり、その残した良いものは主に捧げるために残したと言うのです。「自分の力を誇示すること」、「嘘偽りを言うこと」、「民に責任を転嫁すること」、「自己正当化すること」、これらを並べ立てたサウルに対してサムエルは言います「主はそのみ言葉に聞き従う事を喜ばれるように、燔祭や犠牲を喜ばれるであろうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる」（サムエル上15章22節）。

こうしてサムエルはサウルが主の言葉を捨てたので、神も彼を捨て、王位から退けられると宣告します。それを聞いたサウルはサムエルに願います。「わたしは主の命令とあなたの言葉にそむいて罪を犯しました。民を恐れて、その声に聞き従ったからです。25 どうぞ、今わたしの罪をゆるし、わたしと一緒に帰って、主を拝ませてください」（サムエル上15章24節、25節）。サウルは自らの罪を認めます。そして自身の心境を「民を恐れて、その声に聴き従った」と告白します。そう、彼は鼻から息する者を恐れ、鼻から息する者の声に聴き従ったのです。

しかし、サムエルはもはやサウルの言葉を聞き入れず、その場を立ち去ろうとします。その時にサウルはサムエルにすがるようにしてこう言うのです。「わたしは罪を犯しましたが、どうぞ、民の長老たち、およびイスラエルの前で、わたしを尊び、わたしと一緒に帰って、あなたの神、主を拝ませてください」（サムエル上15章30節）。

自分は「神を恐れずに民を恐れていた」と言い表すことにより、サウルは悔い改めたかのように見えました。しかし、その告白の直後に彼がサムエルにしがみついて願ったことは「民の長老たち、イスラエルの民の前で私を尊んでください」ということでした。そうです、彼の関心は最後の最後まで鼻から息する者であり、その鼻から息する者に対して自らの面子を保とうとしたのです。これらのことにより、サウルの上に神の御手はもはやなく、彼はしばらくその王座に留まりますが、その毎日は彼に代わって油を注がれ、やがてサウルの後にイスラエルの王となるダビデへの嫉妬（サムエル記上18章6節－9節）と恐れ（サムエル記上18章12節）、最後には悪霊が彼に臨み（サムエル記上19章9節）、彼は息子ヨナタンと共にギルボア山で死ぬのです。

「鼻から息するイスラエルの民」は自分達に必要なのは「鼻から息する王」だとサムエルに願いました。神様は彼らがご自身よりもこの「鼻から息する者」に頼ろうとする彼らの思いを受け入れ、民が王として望む外観をもった鼻から息するサウルをイスラエルの初代の王として立てます。しかし、彼は初めから最後まで神を畏れず、神により頼むことなく、鼻から息する者達だけを恐れ、鼻から息する自分を誇り、自分の過ちを鼻から息する者達へ責任転嫁し、その王政は混乱しました。そうです、イスラエルの民は鼻から息するサウルだけにより頼み、そのサウルは鼻から息する民だけを恐れたのです。両者に欠けていたことはただ一つ、神を畏れ、神により頼むということでした。

私はこれからも人を信頼し、人に寄り頼むと思います。私の人生に代えがたい喜びと希望を与えてくれたのはこの人間です。このことはこれからも変わりません。しかし、これだけは忘れないでいたいのです。人は人である限り、今日見てまいりましたように不完全なものであるということ。私が全幅の信頼を寄せている人がその信頼に応えることができないかもしれないということ。同時に私自身が誰かが私に寄せてくれている

2017年3月5日 「鼻から息する者」

信頼に応えることができないこともありうるということを。私達はこれらのことを特別驚き怪しむことはありません。私達の思いにかなわないことがたとえあろうとも、恩が仇で返されるようなことであったとしても、鼻から息する人間である限り、それはさもありません。これらのことを何度も何度も経験して私達は導かれるのです。主こそが我らがより頼むお方であるということ。

これらから私達が導かれる結論は我々が鼻から息をする者に全幅の信頼を置くのではなく、我らの鼻に息を吹き入れられ、ゆえに生きるものとなった主に我々の信頼を置くということです。これまで見てきておりますイスラエルの民、そこにかかわる預言者や王たちの姿は私達に実にこのテーマを何度も語りかけているのです。最後にエレミヤ書の言葉をもってこのメッセージを終えたいと思います。

5 主はこう言われる、「おおよそ人を頼みとし肉なる者を自分の腕とし、その心が主を離れている人は、のろわれる。6 彼は荒野に育つ小さい木のように、何も良いことの来るのを見ない。荒野の、干上がった所に住み、人の住まない塩地にいる。7 おおよそ主にたより、主を頼みとする人はさいわいである。8 彼は水のほとりに植えた木のように、その根を川にのばし、暑さにあっても恐れることはない。その葉は常に青く、ひでりの年にも憂えることなく、絶えず実を結ぶ」（エレミヤ17章5節—8節）。

主に全幅の信頼を置くことにより、私達は人への信頼を失うものではありません。主に全幅の信頼を置くことにより、私達はますます互いの理解を深めることができます。そう、それは私達は互いに鼻から息をする人間なのだという理解であり、このことにより私達は互いの関係を正しく保つことができるのです。お祈りしましょう。